

#### 第四講 再び「聞信」に付いて

##### 信の一念

私は、特に、一度心ゆくまで、抑止門について味読したいと考えていたので、聖人は信巻末の初の御引文には除いていられるにも関わらず、抑止門について書いて来た。それは、信巻末の最後にそれを説いていられるのであるが、そこまでは、この題下では頂かない気なので、特にここに於いて頂いたのである。

さて聖人は、大経本願成就の文に次いで、更に、(一)無量寿如来会の本願成就の文と、(二)大経下巻の東方偈の、いわゆる破地獄の文と、(三)更に如来会のそれに当る文との三文を出し、(四次に涅槃経の文を引いておられる。これについて味読することにした。まず初の三文を挙げる。

「又(如来会)他方仏国の所有の衆生、無量寿如来の名号を聞きて、能く一念の淨信を發して、歡喜せむ、と言えり。

又(大経)其の仏の本願の力、名を聞いて往生せんと欲えと言えり。

又(如来会)言わく、仏の聖徳の名を聞くと。」

以上の三文は皆、大経の成就の文を助顯せんとして載せられたものである。まず最初の如来会の成就文を、大経の成就文に比較するに、まず大経の「諸有衆生」が「他方仏国の所有衆生」と丁寧になつており、諸仏の国土における一切の衆生と示されており、次に「其の名号を聞きて」が、「無量寿如来の名号を聞きて」と具体的に説かれ、「信心歡喜せんこと、乃至一念せん」が、「能く一念の淨信を發して、歡喜愛樂せん。」となつている。憶うに、聖人が、この如来の文を引用して助顯せんとせられる第一の意味はここにあるのであろう。大経の「乃至一念」とあるのは、信の一念であるのか、あるいは行の一念であるのかが明瞭でない。しかるに、如来会の文には正しく「能く一念の淨信を發して」と現わされている。これによつて見れば、救いの確立するのは、信の一念においてであることが明かとなる。以下漸を追つて明らかになる。

##### 聞名欲往生

次には、大経下巻の東方偈(三十行偈)の有名なる文である。この文の全文は、行巻の初めに引き給うてある。今は、その全文を示せば、

「其の仏の本願力、名を聞きて往生せむと欲へば、皆悉く彼の国に到りて、自ら不退転に致ると。」

行巻においては、十七願成就の名号の徳を顯すに、この十八願念仏往生の誓いを顯わされた文を以てさらされたのである。しかるに、今は、その下半分(十一願の世界を顯す文)を除いて、聞信の世界を顯す文だけを示されたのである。

この文に於いて特に注意すべきことは、「其の仏の本願力、名を聞いて往生せんと欲へば、皆悉く彼の国に到り・・・。」と読んで知らるるが如く、「信心」の文字のないことである。其仏本願力、阿弥陀仏の本願力によつて、聞名欲往生、名を聞いて往生せ

んと欲わば、浄土に往生することが出きる、と説かれてある。これは一体何故であるか。

憶うに、聞名欲往生ということの中には、聞其名号信心歡喜の全てが含まれていることを示さんとせられるのであろう。言いかえると、名号を聞くということが、そのまま信心歡喜ということである。そのことを示さんとせられるのでなくてはならない。しかるに世の多くの求道者は、其の名号を聞くということと、信心を獲るということを別々にして、聞くこと以外に信心を持ち出そうとする。あるいは、固い信心を造ってしまつて、それから、この信心の都合のよいことを聞こうとし、引いては、この信心によつて、教そのものさえ曲げて来る。その固い信心の出来ない者は、「聞くことはよくわかりますし、如来も疑いはしませんが、信心が出来ません」と、信心を自分で造り得ないと歎く。たまたま例話や譬えに涙でも出れば、これでこれだと思ひ、その座を去れば、又再びもとの如くくり返す。前者は、信心に似て憍慢なる自力に外ならず、後者は、若存若亡の疑惑の然らしむるものである。

こうしたことになるのは、聞名以外に信心を求めるからである。名を聞くということとは、如来の本願の意を聞くことである。大悲のお心にふれてゆくことである。限りなく聞かんとする心がなければ、名を聞くことは出来ないが、聞いた心に中心があるのではなく、名号のうちに我を助ける力があるのである。あたかも天上の月が水にうつるが如く、法界衆生心想の中に、名号の月が映り現われるのである。水中を如何に探し求めても月は無いが如く、衆生の心中に如来の月はあり得ない。唯あるものは、三毒の煩惱の水にすぎない。しかも、限りなく如来の名号を聞こうとする心が、名号を聞く時、名号の久遠の月は、聞くままに衆生の心想事成に影現したまうてある。これ即ち如来回向の信心である。

### 大經の宗教

大無量壽經の宗教は、「聞」ということを、その中心生命とする。何となれば、大無量壽經は、つぶさに如来の本願の因果を説く經だからである。久遠の本仏が、衆生に向つて願行を發して、衆生をその大悲の胸中に撰取したまうことを説かれる經だからである。如来より衆生への久遠の親心を説かれる經なるが故に、ただ静かに渴仰の頭を垂れて、一切凡聖の自力の雑音を超えて聞くべきである。

如来は、教えを通して、人生によびかけたまい、名告りたまうのである。その名告りたまうみ声に聞き入ることより外に、衆生の浄土への道は開けない。衆生の生きる眞實の道は、唯、この如来のみ声によつてのみ開かれるのである。

誠に聞くこと以外に信心はない。信心歡喜が聞くのではなく、聞くままが信心歡喜である。念仏が衆生往生の正定業であるということは、念ずる衆生の功に非ずして、念ぜられる名号そのものが、衆生往生の正定業である。念仏によつて、往生之業念仏為本と、浄土への道が成就されても、それは、衆生の称名の数や功にあるのではなくて、如来本願のお誓いによるのである。であるから、念仏往生の教えを、師上人より受けたる親鸞は、かえつて眞實の信心、本願の信樂に歸入せられたのである。眞實の念仏とは如来の名号を聞くことである。聞くこと以外に念仏はない。眞實の名号を

聞く者は、必ず、乃至十念のお誓いの如く、念仏称名の行に生きるのではある。我らは決して称名念仏を軽んずるものではない。衆生の行業が如来に如何に相応すべきであるかを説ける観経に立つ限り、しょせん念仏行以外に、浄土に通ずる行はないが故である。

竜樹もすでに、難易二道判に於いて、如来の名を称して不退転地に到り得ることを説きたまうた。しかしながら、内に自力悪逆のみを蔵し、とうてい、浄土には縁なき衆生といえども、手には念珠、身には殊勝気なる相を装うて、声高々と称名して、自他を欺き得るのは何故であるか。あるいは名利の為には、長時の称名、読誦、礼拝にさえ、堪え得るまでに慣れ得るであろう。称名しつつ、それがかえつて世を偽る虚偽相となるは、何故であるか。

その原因は一あつて二なし、唯、如来久遠の御心を聞かぬのである。いまだ真実の教えに触れぬのである。本願の真実に触れぬのである。久遠の月、未だその機の真実を照破せぬのである。されば聖人は、この引文の次に、

「しかるに経(大経)に聞と言うは、衆生仏願の生起本末を聞きて疑心有ること無し。是を聞と曰うなり。信心と言うは、別ち本願力回向之信心なり」と仰せられた。

聞というのは、仏願の生起本末を聞いて疑いのないことである。この疑いこそは、自力の信心を建立して聞に對しようとする心である。聞と信とを別々にして、邪見の機を通そうとする自力である。されば「信心と言うは、則ち本願力回向之信心なり」と言われるのである。ただ名号を無我に聞く処、名号の徳はそのまま衆生の機に印現して信心となる。これを回向というのである。であるから、如来会には、「仏の聖徳の名を聞く」と説かれるのである。名とは、仏の聖徳の全てである。その聖徳の名を聞くこと以外に信はない。一も聞であり、二にも聞である。ついに聞くことこそ助かつて行く唯一の道である。

#### 聞不具足

次に『涅槃経』の文が引かれる。

「涅槃経に言はく、云何が名づけて聞不具足と為る。如来の所説は十二部経なり。唯六部を信じて未だ六部を信ぜず、是の故に名づけて聞不具足と為す。復是の六部の経を受持すと雖も、読誦に能わずして他の為に解説するは、利益する所無けむ。是の故に名づけて聞不具足と為す。又復是の六部の経を受け已りて、論義の為の故に、勝他の為の故に、利養の為の故に、諸有の為の故に、持読誦説せむ。是の故に名づけて聞不具足と為す、とのたまへり」と。

この聞不具足の文を何故に引きたまうたのであろうか。次のようなことがうかがえると思う。

一。如来の所説は、いわゆる十二部経である。十二部経とは、如来の所説の全部を意味する。その如来の所説中、唯六部を信じて他の六部を信じないとは、如来の言の半分を信じて、半信半疑を意味する。半信半疑を意味する。半信半疑ということは、全てを疑うも同一である。

しかるにここに問題がある。仏の十二部経のうちには、小乗もあれば大乘もあり、聖道もあれば浄土もある。若し、浄土のみを信ずるは、六部のみを信ずる人の中に入りはしないか。答えていう。浄土の祖師たちは聖道門を疑ったのではない。聖道の教えをも信じたが故に、その尊高の法の成じ難き機を知ったのである。「機が及ばねば力なし」と信じて、浄土の教えに入ったのである。又三乗の法を説きたまうは、衆生の機を調熟して、一乗の法に入らしめんが為の方便である。浄土の教えに入れる者は、如来十二部経を信じたが故に入ったのである。むしろ聖道門にとどまる人こそ、十二部経を信ぜぬものである。又特に聖人の如きは、聖道を棄てて浄土に入りたまうや、かえつて捨てた一切経を他力信心の智慧を以つて読んで、自家葉籠中のものとせられた。

一。次に「復是の六部の経を受持すと雖も、読誦に能はずして他の為に解説するは利益する所無けむ、是の故に名づけて聞不具足と為す。」

たとえ六部を受持しても、真にこれを読誦することが出来ない。真に読誦することが出来ないとは、ただ眼に見、耳に聞くのみで、信解することが出来ないことである。信心成就しないことである。自らも信じきらず、如実に行ずることもなくして、他の為に解説したところで、利益することはない。これを聞不具足と言われるのである。

一。仮令、六部を受けて、業行を作すとも、それによつて、諍論をなして、勝他の為に、利養の為に、その他、何かの為に、経を読誦し、他の為に説くが如きは、これも亦聞不具足とする。

以上の文は、古来色々に会通されているようであるが、要するに、絶対他力の大信4に入る事が出来ない人をさして、聞不具足と誡めたまわんが為に外ならない。聞不具足は信不具足である。信不具足は聞不具足に起因する。大無量寿経の宗教は「聞名」の宗教である。名号とは生ける如来の招喚の声であり、名告りである。故に衆生にあつては、生死界にあつて浄土の声を聞くのであり、大悲の切々の招喚を聞くのである。聞そのままの信である。

十二部経とは、仏説法の体裁に十二通りあり。故に経文を総称して十二部経という。

一、長行説、法門の義理を散文的に字数を定めず説かれたもの。  
二、重頌説、前の長行を更に字数を定め、韻文的に説かれたもの。  
三、授記説、仏が仏弟子の為に、未来に仏果を成就すべきことを予言的に説かれたもの。

四、孤起説、単純なる韻文説法、これを伽陀という。

五、無間自説、相手が問わざるに説きたまうもの。

六、因縁説、種々の因縁によつて、法を説かれること。

七、譬喩説、譬喩を以つて法を説かれること。

八、本事説、因位の時のことを説かれること。

九、本生説、過去世の苦行等説きたまうこと。

十、方広説、義理広く深く説きたまう経。

十一、未曾有説、未だ曾てあらざりし不思議のことを説かれること。

## 十二、論義説、論議問答の形で説かれるもの。

### 仏願の生起本末

御本典に云わく、

「然るに經（大經）に聞と言ふは、衆生仏願の生起本末を聞きて疑心有ること無し。是を聞と曰うなり。信心と言ふは、則ち本願力回向之信心なり。歡喜と言ふは、身心悅豫之貌を形すなり。乃至と言ふは、多少を撰する之言なり。一念と言ふは、信心二心無きが故に一念と曰う。是を一心と名づく。一心は則ち清淨報土の真因なり」と。唯一の眞実教たる大無量壽經の宗教は、聞其名号信心歡喜と、其の名号を聞くということが、その根本眼目であつた。聞くということを外にしては、信心も安心も、一切がないのであつた。しかるに今、聖人は「聞」ということについて、

「しかるに經に聞と言ふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心有ることなし。是を聞くと曰うなり。」

と釈せられた。「仏願の生起本末を聞いて疑心有ることなし。是れを聞くと曰う。」とは如何なる義であるか。誠にこれこそ、眞宗の最要中の要といふべき問題である。以下、これについて頂戴することにする。

### 生起

「仏願の生起本末」という問題は、眞宗に於ける要中の要なるが故に、古来、相当にやかましい問題の一つであつた。多くの学者は、これに対する賛否はさておいて、多く、<sup>5</sup>樹心録（智暹師著、播磨国の人、元録十五年生誕、明和五年示寂。享年六十七）を引用している。

『樹心録』には、

「生起とは、妙玄一に云く『能生を生と為し、所生を起と為す』と。今濟凡の大悲を能生と為し、称性発願を所生と為す。謂く如来苦惱の一切衆生海を悲憫して、斯の大願を超発するが故に、是を仏願の生起と為すなり。」

と説いている。妙玄、即ち法華玄義一に「能生を生と為し、所生を起と為す」とあるによつて、生起の語を解こうするのである。即ち業苦に沈める衆生を濟わんとする大慈悲が能生（生）、その大慈悲より顕れたる本願が所生（起）、そこで生起とは、凡夫を救わんとする大悲が生、その大悲より生じたる超世無上の大願が起、仏願の生起とは、大悲本願をいうのである。

しかるに僧音の『本典徴決』等には『樹心録』等の意見に従わず、『般舟讚』の中に、「亦須く淨土に入るの縁起、娑婆を出ずる之本末を知るべし。」

とあるによつて、生起ということは縁起ということである、としている。生起とは縁起であるとするれば「生起とは、生即ち起なり。本願鈔に云わく、『本願ノオコリヲ善知識ノクチヨリキキウルトキ』等」と釈せられ、生起とはオコリということである。生と起と分けないのである。

即ち、信卷三信釈において聖人は、

「一切の群生海、無始より已来、乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心無し。虚仮諂偽にして真実の心無し。是を以て、如来、一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於いて、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざること無し、真心ならざること無し、如来、清浄の真心を以つて、円融無碍、不可思議、不可称、不可説の至徳を成就したまへり。」

と仰せられた。衆生は、疑惑の心によつて、如来回向の名号の義を知らない。その時、真実信心は絶無である。真実信心がないが故に、「出離の縁有ること無し」である。この出離の縁有ることなき機を悲愍して、大悲を興したまうのである。この大悲を仏願の生起とするのである。ここにおいて、仏願の生起とは、本願の起らねばならぬ目当ての、無有出離之縁の機が仏願の生起となるのである。

以上、凡を済う大悲を生、大悲より本願をおこすを起と分ける説も、生即ち起とし、生起を縁起又は興起ととり、本願の起こり、即ち、大悲を仏願の生起とする説も、根本に於いて差があるのではない。仏願は大悲によつておこつたのである。大悲は、無始より永劫にむかつて生死海に流転する衆生によつておこつたのである。されば本願の生起を聞く者は、本願の現実的根拠たる、衆生現実の真相にさめるのである。偽ることなき生死の現実、無有出離之縁の深信なくして、どうして、大悲本願を領解することが出来よう。しかして、本願は名号の内的意味なるが故に、本願を領解する者は、回向の名号を受領する。

本末

「聞と云うは、仏願の生起本末を聞きて、疑心有ること無し。是を、聞と曰う。」

(一)樹心録には、本末を釈して、

「本末とは、第十八願を本と為し、余の四十七を末と為す。」決定鈔に曰く「浄土真宗の行者は、まず本願の起りを存知すべきなり。弘誓は四十八なれども、第十八の願を本意と為す。余の四十七は此願を信ぜしめんが為なり。」

と釈している。この考えでは、本末とは、第十八の王本願が本であり、他の四十七願が末である。

(二)しかるに、徴決には、先の『般舟讚』の「亦、須く浄土に入るの縁起、婆婆を出づるの本末を知るべし。」に随い、語例を『涅槃経』の「雨行大臣即ち為に其の本末を説く。」(信巻末引用)にとり、「今は則ち、如来の発願を本と為し、摂受衆生を末と為す。」と云い、『最要抄』の「聞は善知識にあふて、如来の他力をもて(本)往生治定する(末)道理をききさだむる聞なり。」を引いている。即ち如来の本願が本であり、衆生が摂取されて助けられることが末であるとするのである。

であるから彼の二種深信の文の中、法の深信を示せる文に付いていえば、「決定して深く彼の阿弥陀仏の四十八願は(本なり)衆生を摂受して疑い無く慮り無く、彼の願力に乗じて定んで往生することを得(末なり)と信ず。(聞)」といわれる。決定深信は聞であり、本願は本であり、決定往生は末であるというのである。

(三)更に又、本末とは、なお始終と言うが如く、『論註』に「不虛作住持とは、本法藏菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如来の自在神力とに依る。願以て力を成す、力以て願に就く。」とあるによつて、本願を本とし、果上の名号を末とする人も多いようである。(四)光寿無量の両願を以て本と為し、果上の名号を以て末と為すという説があり、又、名号の具する光明無量寿命無量を本となし、名号が具する所の徳本を末と為すという説がある。(窺斑)

(五)更に又、第十八願が本であり、第十九、第二十の方便の願が末であるとの説(円乗院説)がある。即ち、絶対他力の表現たる第十八願が誓願の根本であり、衆生自力の機を誘引転入せしめんが為に建てられた、第十九願の修諸功德の願、第二十願の植諸徳本の願は、方便枝末の願である。この方便の願によつて衆生を誘引して、遂に、他力本願の世界に帰入せしめられるのである。仏願の生起本末を聞くとは、この真仮を聞きわけ、根本本願に転入することを意味するといふのである。

### 要約

以上の外、本末の問題については猶、幾多の説があることであろう。然しながらこれを大別すれば、

(一)如来救済の始終因果について立てられた説、即ち、本願を以て因本と為し、正覚成就の名号以て果末とする説。この説によれば、我等の信心は、本願と名号との因果關係を領解することである。『光融録』に出すが如く、「名号を聞くとは、名号の生起縁由を聞くなり。唯、果号を聞いて縁由(本願のこと)を聞かざるを、名号不思議の機<sup>7</sup>と名く。」真実に本願を領解する者は、名号を領解する者であり、名号を獲得する者は、本願に相応するものである。されば、本末を聞くとは、正しく如来の因果たる本願名号を領解することである。

(二)第二は、四十八願中に於いて、本末を別ける説である。第十八願を本と為し、余の四十七願全てを末とする説は、広略二門の説に立つたものである。略門に立つ限り、本願とは十八願であり、十八願こそ願の根本本質である。それを具体的に表現したものの四十七願である。四十八願全ては、十八願を領解せしめんが為である。されば、本末を聞くとは、四十八願を聞いて、本たる若不生者の十八願を領解すべきこと求めたものである。第一説に比して、本願の領解にまで狭められた説である。

(三)第三は、其の本願の領解において、真仮の価値判断に立ちて、如来の久遠の真実たる第十八願と、その真実に至らしめんが為に、迷妄深き衆生の機に随つて建てられたる、十九、二十の方便の願との、真実権仮について三願転入の上から、本末を定められ、仮を捨て方便を超えて、真実弘誓を領解すべきことを求めたものである。

以上三説は、その細論に至れば、議論もあろうけれども、真実に如来の本願の全てを領解して、第十八願の大海に帰入すべきを求めたことにおいて同一である。如来大悲の因果に立つとも、如来本願の広略によるも、如来本願の真仮によるも、全て正しく如来の真実本願の全てを領解することに外ならない。

「聞と言うは、衆生仏願の生起本末を聞きて、疑心有ること無し、是れを聞と曰ふなり。」

私は今まで、生起と本末とを分けて解する説を挙げたが、又中には生起と本末を分けて、生起即ち本末である（日溪師）との説もある。即ち、仏願の生起本末とは、仏願とは、第十八願、名号を離れざる十八願、生起本末とは、生起そのまま本末である。即ち、仏願の発起は、無有出離之縁の機であつて、いわゆる、機の真実、その機を助けたまうに間違いなきが法の真実、これ本末である。故に仏願の生起本末を聞いてとは、機法二種の真実について深く信ずることではなければならない。

聖人が、かかる釈を出したまうたのは「其の名号を聞きて、信心歡喜し」とある、聞其名号を、「仏願の生起本末を聞く」と仰せられたものである。『御文章』には、

「其の名号を聞くというは、ただおうやうに聞くにあらず、善知識にあいて南無阿彌陀仏の六の字の謂をよく聞き開きぬれば、報土に往生すべき他力信心の道理なりと心得られたり。」

とあり、されば、仏願の生起本末とは、畢竟、名号のうちにくむ謂に外ならぬ「往生治定する道理」（最要抄）を言ったのである。されば「仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし。」これを聞くという。疑心なきことを聞くというのである。であるから、聞とは信を意味するのである。信心成就して、はじめて生起本末を聞いたといわれるのである。

## 聞

『一念多念証文』には「聞其名号というは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくというは、本願をききて、うたがうところなきを聞というなり。」といい、又、「またきくというは、信心をあらわす御のりなり。」とあり、これによれば、聞とは信のことである。聞くとはただ、耳に聞くことではない。仏願の生起本末を信ずることである。如来の全てが衆生の全てとなり、如来回向の大信心が、衆生の機に顕現することである。聞くことによつて、宿善開發して、衆生の上に、仏智さながらの、信心を成就することである。

噫、聞。嗚呼、信。聞くということこそは、遂に、浄土の宗教の全てである。信も、歡喜も、安心も、一念も、白道も、全てこれ聞の相に外ならず、清浄報土の真因たる一心は、唯、聞によつてのみ、衆生の現実の機に成就せられるのである。